無意識のかたち

——四則演算で導く自由

01. コンセプト

現代は「無意識を意識する時代」である。

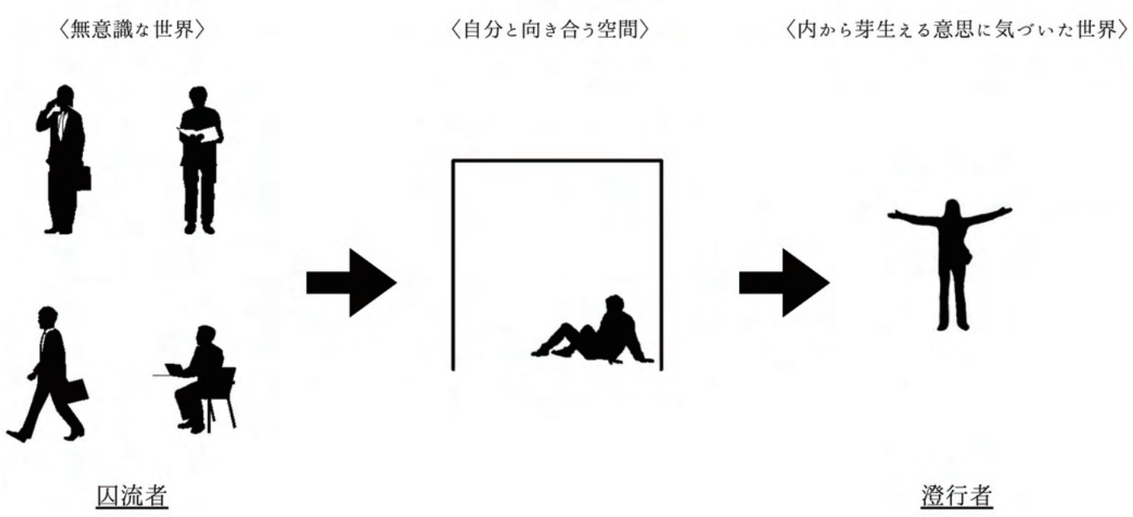
近代以降、自由に生きるための条件が整えられてきた。しかし、誰もが自由に生きることを求め、選択肢に恵まれているにも関わらず、自分が本当に何を望んでいるのか分からなくなることがある。理性的に考え、主体的に生きようとしても、社会の価値観や他者の視線に影響され、気づかぬうちに自分の選択が縛られている。また、現代社会が課す膨大なタスクが、そのしがらみを隠すかの如く、私たちを追いかける。何をすべきか、どうすれば納得できるのか——その問いは、無意識にある「内から芽生える意思」に気づくことなしには答えを見つけることができない。

だからこそ、今、私たちは「無意識」に関心を向ける。意識だけで生きるのではなく、自分の内側にある曖昧な感情や見えない欲求を探ることが、自由に生きるために必要になっているのではないだろうか。

そのためには、日常世界から一度距離を置き、自分と向き合う時間と空間を作ることが要求される。そこで注目するのが、「茶室」である。茶室は、単なる小さな部屋ではなく、無意識に気づき、それを顕在化させるための空間装置である。

この茶室の原理を、現代都市に適応させることはできないだろうか。

そこで手掛かりとしたのが、建築における「四則演算」の可能性である。



02. 四則演算の可能性

× 「現代 × 伝統」ー茶室の再解釈

スピードと情報が氾濫する現代社会。日本の伝統建築である茶室の「内省の場」としての概念を都市に取り組むことは、新たな価値を生む可能性を秘めている。しかし、この概念を「現代社会」という新たな文脈に適応させる為には、茶室の本質を現代的な視点で再解釈し、再構築する必要がある。

「ー」ー削ぎ落としと内省

茶室は単なる空間ではなく、極限まで無駄を削り落とすことで、訪れた人の意識を内面に向かわせる装置である。「削ぎ落としによって生まれる内省の力」こそが、現代社会に必要なのではないだろうか。

「÷」ー空間の分割

茶室における「外部の世界から内面的な空間への移行」は、単なる空間の変化では無く、精神的な変化を促す。このプロセスは、外界と内界の接続を通じて個人の心を整え、自己との対話を可能にする。

「＋」ー思考と感覚の広がり

ただ縮小された空間ではない。そこには、別次元の新たな広がりが存在する。この制約された空間に身を置くことで、私たちの意識は研ぎ澄まされる。その結果、現代社会のしがらみから解放され、思考や感覚の自由が生まれる。

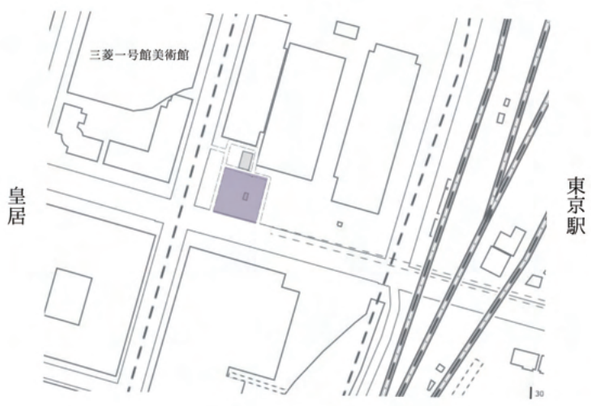
「＝」ー新たな空間の提案

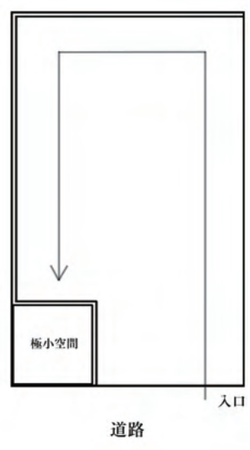
これらの本質をもとに再構築された空間は、単なる伝統の継承ではなく、現代社会における「意識の変容装置」となる。そこで過ごす時間が、私たちの無意識を顕在化させ、自由な生き方へとつながる契機となるのではないだろうか。

「茶室＝伝統」の枠を超え、未来の社会における精神的な居場所となりうる建築を、私たちは次の時代へ提案する。

03. 敷地

敷地は東京駅周辺の丸の内ビル街の一角。





首都東京の真ん中にあるこの場所には、多くの囚流者が存在する。

04. 再構築への道筋

伝統的な茶室は、外界と小空間を直結させるのではなく、門、露地（雑念を取り払って茶の湯の世界に誘う為の通路）という過程を踏んで、最終的に茶室に辿り着く構造となっている。私たちはこの過程こそ、都市の喧騒から私たちを切り離し、内省へと導く鍵となると考えた。

しかしながら、常に騒音や刺激に満ち溢れた都市空間上で「外界の刺激を遮断し、内省を促す」という効果を十分に発揮する現代の露地とは如何なる物であろうか。

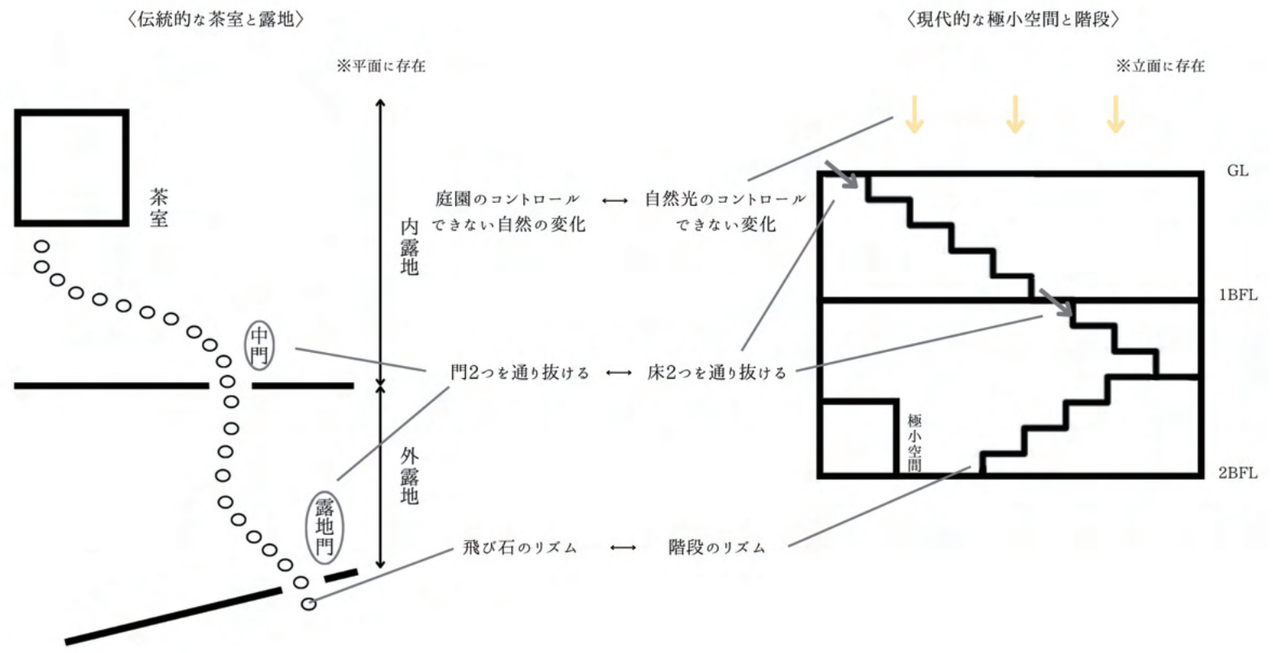
こうした外部刺激を効果的に遮断する為に、私たちが考えたのは「地下構造」である。地下へと向かう構造は、自然光が次第に遮られ、都会の喧騒を遠ざける効果を生み出す。この降りるにつれて徐々に暗くなり、静寂へと導かれる過程は、囚流者を深い内省へと誘導する。

【外界】 ⟶ 【露地】 ⟶ 【茶室】

⬍ ⬍ ⬍

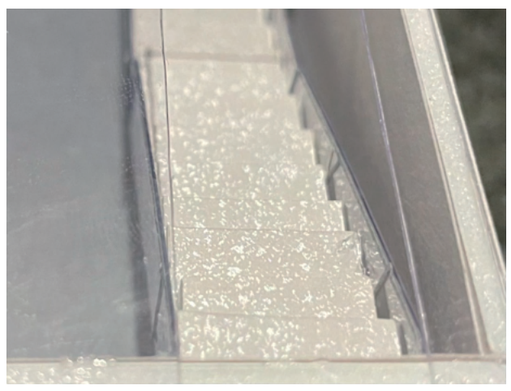
【都市】 ⟶ 【暗くなる階段】 ⟶ 【極小空間】

さらに、平面的な露地と茶室の関係を立体的に再構築し、限られた敷地でも実現可能な、都市に適応した空間へと昇華させた。都市の中にありながら、段階的に空間を変化させ、自然と内省へと向かう体験を可能にする。



05. 形態と空間

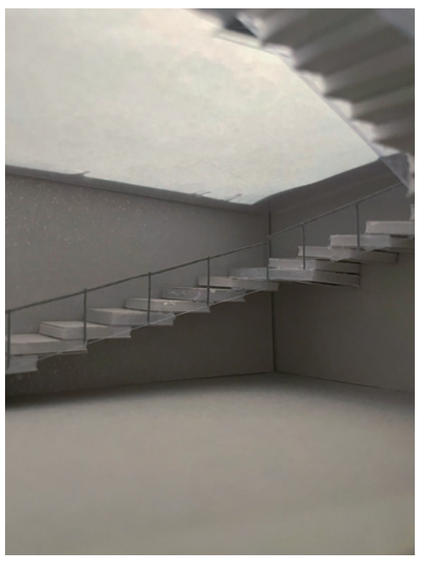
①入口
入口を抜けた先には、まるで異世界のような空間が広がり、人々は都市の喧騒から切り離された感覚を覚える。

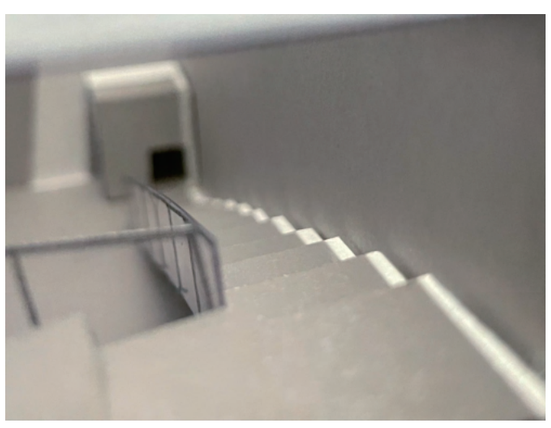


②GL
ガラスを用いることで、都市の騒音を遮断しながらも空間に自然光を取り込む。

③階の切り替わり
地下１階、地下２階へと続く入口は、それぞれ「門」としての役割を担う。
そのため、階の切り替わり部分では、あえて段差を急勾配にし、床と階段の角度を垂直に近づけた。さらに、開口部を狭めることで、あたかも「床を通る」ような感覚を生じさせた。
この過程は、人々に空間の変化を身体的に実感させる。

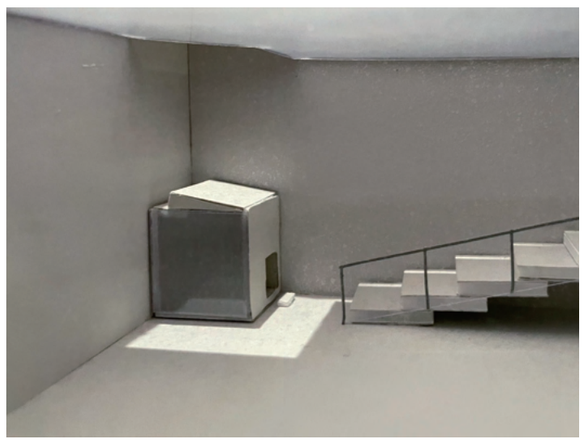
④B1FL
透過性をもつ素材を用いることで、徐々に暗くなるが、圧迫感の少ない空間を作り出す。





⑤スリット
光の道しるべに従って、人々は極小空間へと導かれる。
また、時間とともに移ろう光と影は、日本庭園の「自然の力や時間の流れを感じさせる機能」とも一致する。

⑥開口部
この開口部は、極小空間に自然光を取り込む役割を果たす。
また、上方から降り注ぐ光の帯によって、人々は極小空間へと誘い込まれる。



⑦極小空間

・二畳の空間
伝統的な極小茶室にも用いられている「二畳」という空間設計。
無駄を省き、内面的な精神の移行を促すための極限の空間とする。

・入口
入口には、伝統的な茶室の特徴である躙口の要素を取り入れた。躙口とは、頭を下げて屈んで入る小さな入口であり、入ることで身分を捨て、ありのままの姿で向き合うという意味を持つ。その精神を反映させたデザインとなっている。

・天井
二畳という極小空間でも開放感を持たせるため、中柱の通りで一段下げ、平天井と勾配天井を設けるという伝統的な茶室の技法を採用した。
また、二種類の天井の境を開口部にすることで、自然光を採り入れることを可能にした。

・壁（一面）
一面を透過性のある素材にすることで、空間に開放感を持たせる。
また、自然光を採り入れながらも明る過ぎない、内省に適した空間となっている。

伝統的な茶室は、踏石（脱いだ履物を置くための大きめの石）で靴を脱ぎ、茶室へ入る。私たちの提案する建築もまた、入口の前に置かれた段差で靴を脱ぎ、極小空間に入っていく。この行為は単なる動作ではなく、精神の開放を促し、自己との対話へと導く重要なプロセスである。
そして、一歩足を踏み入れた先には、何もない空間が広がる。ただそこに身を置き、余計なものを削ぎ落とした環境の中で、自分自身と向き合う時間が生まれる。